

# 山城国愛宕郡の王塚

高橋 潔

## 1. はじめに

江戸時代の紀行『近畿歴覧記』のうちの「東北歴覧之記」の冒頭に深泥池の南に「王塚」があるという記述がある。後述するように、この王塚は御陵ではないかと記されている。現在、深泥池の南にあたる一帯には植物園北遺跡という弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡が知られているものの、その遺跡内には塚や古墳の存在は知られていない。

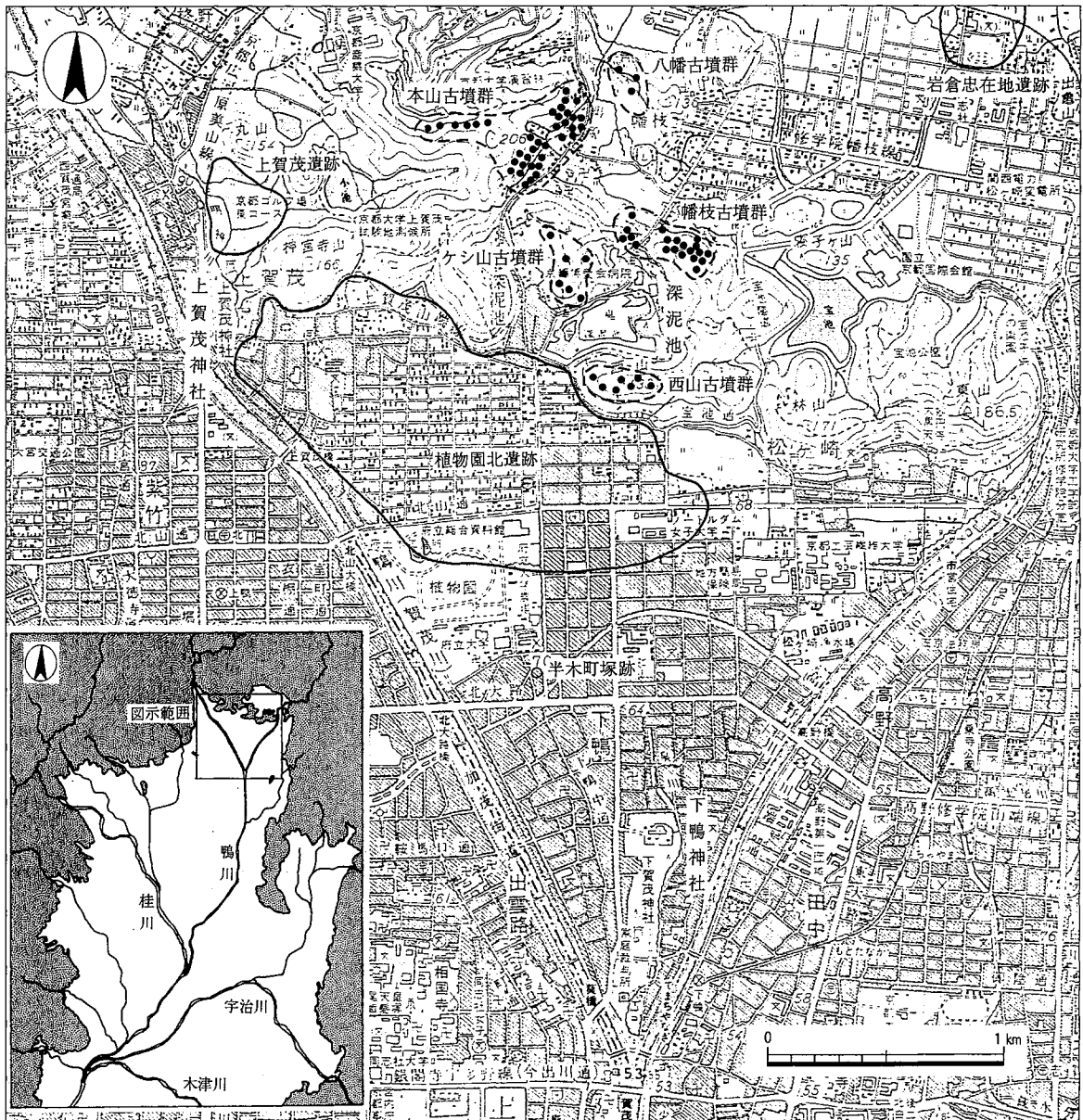


図1 植物園北遺跡の位置と周辺の古墳時代の遺跡分布図 (1:30,000)

植物園北遺跡は京都盆地平野部の北端、賀茂川と高野川の合流する地点にある下鴨神社（賀茂御祖神社）の北西に位置する。京都府立植物園の北半を含む北側一帯、賀茂川左岸の上賀茂神社（賀茂別雷神社）周辺を頂部として南東に発達した扇状地上に立地している。遺跡の北は、標高150m前後の本山丘陵や松ヶ崎丘陵が画し、丘陵の裾には氷河期の水生植物が遺存分布することで著名な深泥池<sup>(1)</sup>があり、この西端を通して北東に丘陵を越えると岩倉盆地へ至る。遺跡は1974年京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会によって発見<sup>(2)</sup>され、1978年から約4年間の下水道管などの布設工事ともなう立会調査<sup>(3)</sup>で、弥生時代後期から古墳時代前期および古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落遺跡であることがわかった。その後の調査で、縄文時代晩期以降、中世におよぶ複合遺跡であることが確認されており、東西約2km、南北1.2kmの広大な遺跡範囲が与えられている<sup>(4)</sup>。現在の行政区では、京都市北区上賀茂および左京区下鴨・松ヶ崎にあたる。

また、遺跡の北を画する本山丘陵から深泥池周辺および岩倉盆地の南西部にかけては、古墳時代後期を中心とする古墳群が多く存在し、京都市域でも古墳の密集する地域の一つである。岩倉盆地には、当該期の岩倉忠在地遺跡が存在するがこれまで遺物は検出されるものの明確な遺構が検出されていない。このことから、これら古墳群は最も近接する植物園北遺跡の古墳時代集落の造営したものとする見方もある<sup>(5)</sup>。

しかし、『近畿歴史記』の記述は遺跡内あるいはその周辺に「塚」が存在したことを示しており、もしそうであれば、遺跡の立地する平地側にも古墳が存在した可能性があるものと考えられる。この「王塚」については『リーフレット京都』<sup>(6)</sup>にその概要を発表したが、紙幅の都合で十分に述べきれなかったこともあるので、改めてまとめておくことにしたい。

## 2. 文献に記された王塚

江戸時代には京都に関する案内記、名所図会、地誌、紀行文・見聞記のほか、年中行事を記したものが数多く出版されており、当時の京都の様子を知る上で欠かすことのできない史料と言えよう<sup>(7)</sup>。これらの文献中に、「塚」や「冢」についての記述も少なからずあり、それは名所旧跡や古跡として、あるいは道標的なものであったりする。しかし、なかには由来、位置、大きさなどについて詳細に記しているものもあり、記された当時の塚の様子やその塚がどのように認識されていたかなどについて知る手掛りとなるものもある。

江戸時代の京都・山城において、文献上に現われる「王塚」は三つある。本稿で取り上げる愛宕郡の王塚と葛野郡の王塚、綴喜郡の王塚である。まず、葛野郡の王塚と綴喜郡の王塚について簡単に述べておくことにする。なお、本稿で用いる各文献の当該箇所は文末に一括して掲載している。

葛野郡の王塚は、「谷の地蔵院」<sup>(8)</sup>の門前にあるという。『雍州府志』第十[史料九]によると主上(天皇)の車塚であろうがその真偽はわからないとされている。天皇の車塚と記されていることから、比較的大きな塚ではなかったかと思われる<sup>(9)</sup>。これまで比定されている古墳はないが、位置的な関係から現在の地蔵院の東にある上ノ山古墳あるいは穀塚古墳<sup>(10)</sup>を指している可能性が考え

られる。

綴喜郡の王塚は『山州名跡志』巻之十三〔史料十〕によれば、八幡の内里・岩田・戸津・松井各村領の山で、塚の高さ四間半、周囲は八十間という。継体天皇陵だという言い伝えがあるが、延喜式に継体陵は摂津国嶋上郡にある<sup>(12)</sup>とされているので疑わしいと付け加えている。現在、八幡市美濃山大塚に王塚古墳<sup>(13)</sup>が現存している。

さて、愛宕郡の王塚の初見は、管見による限り、本稿冒頭に挙げた黒川道祐<sup>(14)</sup>の『近畿歴覧記』と考えられる。

『近畿歴覧記』のうちの延宝九年（1681）の「東北歴覧之記」〔史料一〕の記述によると、道祐は白雲村を出発して、烏丸通を北に、今出川通を東に行き、出雲路を右手に見ながら京極の中川を渡り、鴨川（賀茂川）を経て、御手洗ノ森（下鴨神社・糺ノ森のことか）より北へ出ている。すると深泥池の南に王塚という車塚の跡があり、その西に王塚縄手という道があるという。この塚は一代の主上（天皇）の御陵であろうと述べ、どの代の御陵であるか知りたいものだという。つまり、下鴨神社の北、深泥池の南に「王塚」があり、天皇陵ではないかとし、王塚の西には王塚縄手という道があるというのである。

つぎに、同じ道祐の著作で貞享元年（1684）の序のある『雍州府志』〔史料二〕の「第十 陵墓門」の愛宕郡の項に王塚の記述があり、「第八 古跡門 上」には王塚暎の記述がある。陵墓門の記述では、王塚は深泥池の南にあり、いずれの帝のために造られたものかわからないと御陵である可能性を述べる。王塚暎は王塚の西にあって西南に通じる路で「古参詣人往来之道路」であろうかと推測している。一方、古跡門では、王塚暎は松崎<sup>(15)</sup>の西南、王塚の南にあるとし、同様に王塚への参道かと記している。両者の記述には多少の齟齬もみられるが、ほぼ『近畿歴覧記』の記述内容を踏襲しているものといえる。

続いて、元禄二年（1689）の『京羽二重織留』巻之五〔史料三〕の「雑塚」に王塚・王塚縄手、翌元禄三年（1690）の『名所都鳥』巻第六〔史料四〕では「塚之部」に王塚、「暎之部」に王塚縄手が記されている。いずれも深泥池の南に王塚があり、御陵であると述べ、また王塚縄手は王塚の西にある道をいうと記している。

上記の十七世紀代の四つの記述のうち、黒川道祐が著した『近畿歴覧記』・『雍州府志』の記述は実際の見聞に基づいているものといえよう。しかし、のちの『京羽二重織留』や『名所都鳥』の記述は『雍州府志』の記述に酷似し、これを訓下したものと思われることから、いずれも実見に基づいた記述ではないと考えられる。

これに対して十八世紀の文献には、この愛宕郡の「王塚」として取り上げられる塚はみられない。ただ、松崎村、あるいはその西に「小塚」があるという記述が『山州名跡志』、『山城志』、『山城名跡巡行志』〔史料五～七〕にみられ、『山州名跡志』の記述に「王塚」との関連を記していることから同じ塚を指して小塚と称したことが知れる。

正徳元年（1711）の『山州名跡志』巻之六〔史料五〕には、松崎の西二町ばかりの畠のなかにある塚を「小塚（ヲヅカ）」といい、その由来は昔ここで討ち死にした小柄な僧を埋めたためい

文献名	塚	塚の位置	縄手	縄手の位置
近畿歴覽記	東北歴覽之記	王塚 御泥池ノ南	王塚縄手	其ノ西
雍州府志	第十 陵墓門	王塚 御泥池南	王塚暎	其西
	第八 古跡門上		王塚暎	松崎西南王塚南
京羽二重織留	卷之五	王塚 洛北みぞろ池の南	王塚縄手	其西
名所都鳥	卷第六 塚之部	王塚 御泥池の南	王塚縄手	其西
	卷第六 暎之部		王塚縄手	松が崎の西南、王塚の南
山州名跡志	卷之六	小塚 松崎西二町許島中		
山城志	愛宕郡【陵墓】	小塚 松崎村		
山城名跡巡行志	第三	小塚 (松崎) 村西二町許島中		
京都府地誌	愛宕郡松ヶ崎村志	王塚 西南圃中		

表1 塚の位置と縄手の位置

うとある。文末に一説に王塚といているのは土人（地元の人々）の片言であると記している。

しかし、この小塚について、享保二十一年（1736）の『山城志』[史料六]では松崎村にありと、また宝暦四年（1754）の『山城名跡巡行志』第三[史料七]では松崎の西二町ばかりの島のなかにあるとの記述があるに過ぎず、王塚との関連には触れられていない。以後、小塚の記述も江戸時代の文献にはみられなくなる。

ところが、十九世紀後半、明治になって編纂された『京都府地誌』のうち、「愛宕郡 村志」松ヶ崎村の古跡の項には、「王塚」が再び登場する。村の西南の圃中にあり凡そ一坪とある。また、『山城志』のいう松ヶ崎村の小塚とはこのことかと付け加えている。ここで再び王塚の名称が浮上してきている。しかし、明治四十四年（1911）に刊行された『愛宕郡村志』には王塚についても、小塚についても記述されていない。

王塚と王塚縄手の呼称と位置を整理すると表1のようになる。十七世紀代の文献の記述から、王塚は下鴨神社の北、深泥池の南、つまり下鴨神社と深泥池の間に存在したものと考えられ、王塚の西に王塚暎という道が存在していたという。王塚は御陵であろうとの記述から、比較的大きな塚であったとも考えられる。また、車塚の跡と記されていることから、やはり古墳の一種であろうとの予測がつく。これに対して、十八世紀に入ると松崎の西二町に小塚があるとの記述がみられ、『山州名跡志』に「王塚」との関連が記されていることから、十八世紀代にはこの塚が「小塚」と呼ばれていたことがわかる。小塚という呼称からも推測される通り、小さな塚である可能性が高いといえる。そして、王塚の名称は、地元では伝承され『京都府地誌』に収録されたものと思われるが、これを最後に記録がなくなってしまう。

このようにみえてくると、この塚の名称については次のように考えることができる。この塚は、地元で「わうづか」あるいは「をづか」と呼ばれていた。「わう」と表記されるが、実際には「おう」と発音されていたものと思われる。つまり、「おう」とやや延ばし気味に発音するか、「を」と延ばさずに呼ぶかの違いであって、地元では「お（う）づか」と呼ばれていたと思われる。これを『近畿歴覽記』・『雍州府志』では「おう」に「王」の文字を充て、『山州名跡志』などでは「を」に「小」の字を充てたのではないか。『山州名跡志』であえて王塚の名称が「土人ノ片言」と、王塚に対する否定を書き添えていることから、これを裏付けるのではないだろうか。

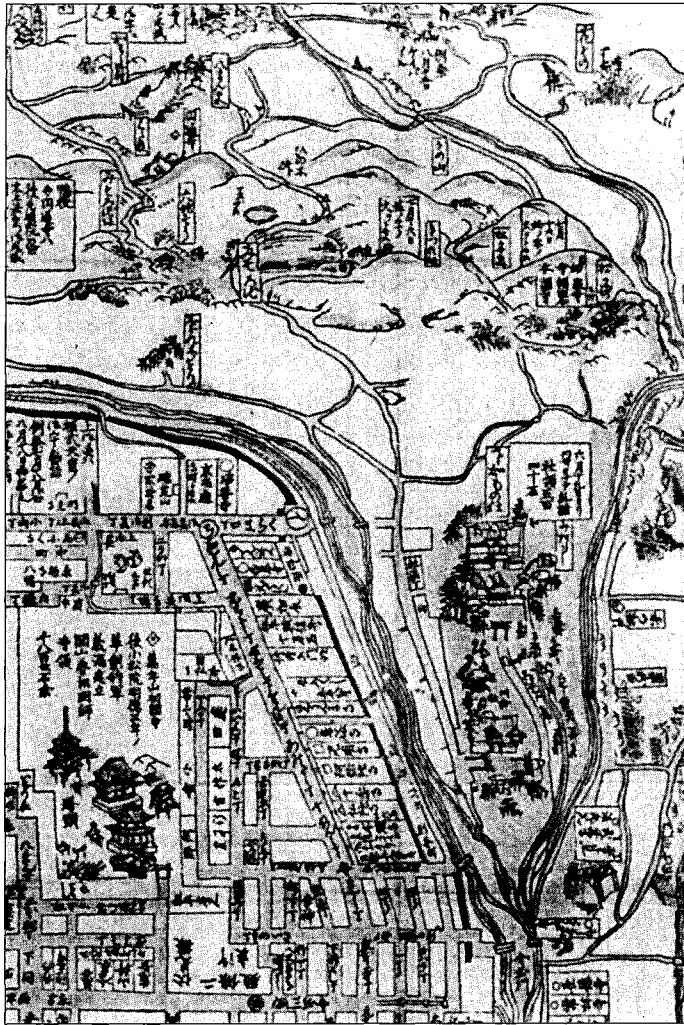


図2 『京大絵図』(寛保元年図)

元年(1716)、寛保元年(1741)に刊行された三種である。このうち、元禄四年刊のものには小山は描かれておらず、後二者には小山が描かれている。この補訂が重ねられた『京大絵図』のどの版からこの小山が加えられたかは定かではないが、少なくとも享保元年図以前に加えられ、ほぼ出版が終えられる寛保元年図までは記載されていたものと思われる。

『近畿歴史記』の「東北歴史記」の記述によって道筋をたどれば、まさしくこの小山が王塚であることがわかる。今一度、その記述を振り返るとこうである。

…鴨川ヲ経テ、御手洗ノ森ヨリ北ニ出ツ、御泥池ノ南ニ王塚トテ車塚ノ跡アリ、其ノ西ニ王塚繩手ト云フ路筋アリ…

陸地測量部の明治四十二年(1909)測図『京阪地方 仮製二万分一地形図』「京都」(図3)によってみると、下鴨神社の西側から深泥池に向かって一条の道が伸び、その中ほど、北西に伸びた道筋が真北へ向きを変える位置の東側に円形の高まりが表記されている。先の『京大絵図』に描かれた小山の位置と一致することがわかる。この一条の道は現在の下鴨中通(鞍馬街道)であり、王塚の西を通っていた王塚繩手はこれを指しているものと思われる。

その後の地図をたどっていくと、この高まりは、昭和六年(1931)発行の『二万五千分一地形図』(大正十一年測図、昭和二年修正測図、同五年鉄道補入)までは確認できるが、それ以後の

### 3. 王塚の位置

江戸時代、先の地誌などと同様に、京都の絵図類も数多く出版される。これらの絵図には、天皇陵・陵墓や塚などのうち主要なものが描かれ、その名称も併せて書き込まれている場合がある。見得る限りの京絵図についてこの下鴨神社と深泥池の間に「王塚」の文字を探したが、その書き込みのあるものはなかった。しかし、王塚の書き込みはないものの、下鴨神社と深泥池を結ぶ道筋の東側に小山状の図が描かれている絵図に行き着くことができた。それが図2に示した『京大絵図』である。『京大絵図』は林吉永が貞享三年(1686)から六十年間近くにわたって幾度となく部分補訂を重ねながら出版した絵図である。そのなかで管見に触れたものは、元禄四年(1691)、享保

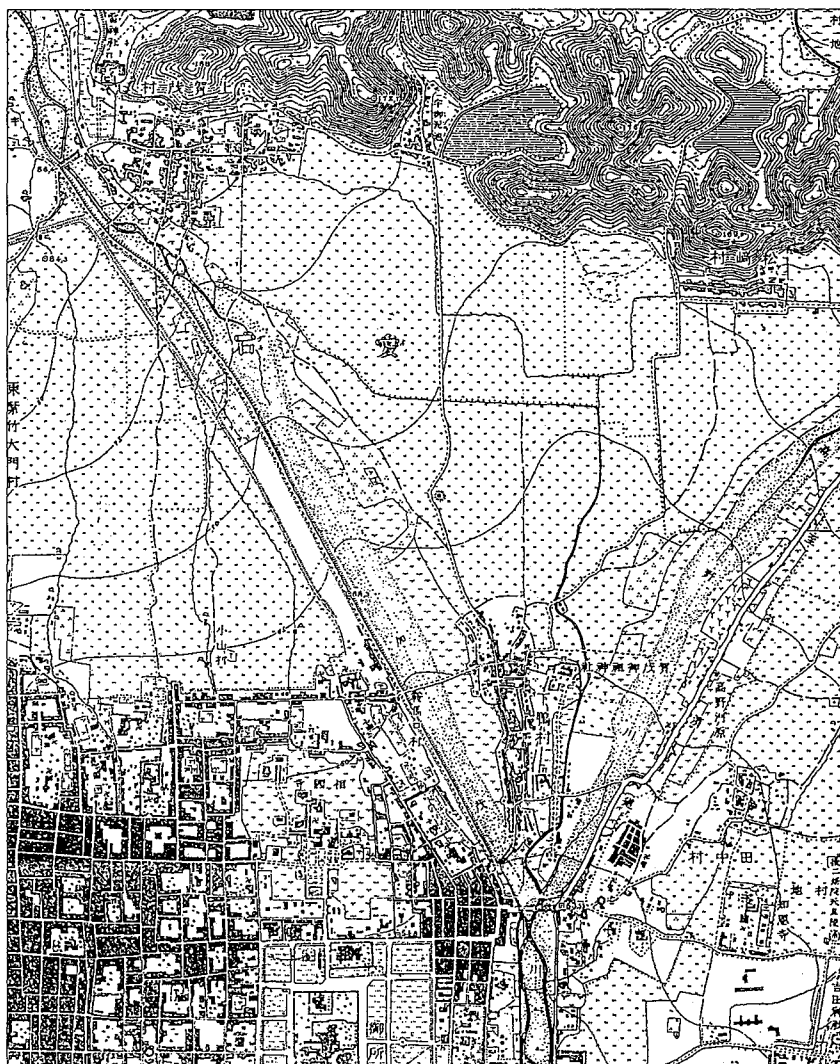


図3 『仮製二万分一地形図』  
(1:30,000に調整した)

地図では田畑であった塚の周辺が区画整理されおり、高まりは表記されなくなってしまう。

この位置は、京都市左京区下鴨半木町、京都府立大学の南東端のやや南にあたり、図1では白抜きの○印で示した「<sup>なからぎちよう</sup>半木町塚跡」がそれである。現在は住宅地になっている。明治から昭和初期の地図に記された高まりは、直径20m程度の円墳状の高まりであったことがわかる。

#### 4. 昭和・平成の証言

さて、この高まりについては、左京区下鴨東梅ノ木町の市立葵小学校の『葵五十年誌』<sup>(9)</sup>や下鴨学区の教材として用いられている『親

と子の下鴨風土記』<sup>(17)</sup>に記されている。この二冊に書かれた内容を要約すると次のようになる。

京都府立大学の南東にあった塚は、西の塚、西大塚といい、また石城山とも呼ばれた。これに対して東の塚、東大塚というのがその東（現在の下鴨高木町・塚本町）にあり、こちらは寄合塚・呼寄塚と呼ばれた。いずれも古墳である。むかし、どちらの塚も、農事などに関する相談事のあるときに麦藁を炊いて、中村郷の人々は西の塚、蓼倉郷の人々は東の塚に集まったという。また、いずれも壊したときに瓦や墓石など一杯出てきた、西の塚は戦後に壊した。

つまり、この高まりは西の塚などと呼ばれ、戦後に壊したという。これに対して東の塚があるという。この東の塚の位置は明確であるけれども、西の塚が記されている明治から昭和初期の各地図に記されていないこと、上記二冊の記述の内容などから、西の塚よりも早い時期に壊されたものと思われる。なお、東の塚に該当する「塚」の記述は江戸時代の文献には見られない。

ところで、『葵五十年誌』では、戦後にこの塚（西の塚）を壊したと述べられている。しかし、全章でも触れたように、先に挙げた昭和六年発行『二万五千分一地形図』以降の地図では周辺の区画整理が行なわれ、明らかにこの場所も宅地化されており、この塚が戦後まで残っていたとは

考えにくい。塚の消滅はもっと早い時期であることがわかる。この周辺の区画整理事業は、昭和三年に開始され昭和五年に完了した。おそらく、この区画整理に伴ってこの塚も消滅してしまったと思われる。

#### 5. 愛宕郡の王塚 ーまとめにかえてー

愛宕郡の王塚は、十七世紀代の『近畿歴覧記』をはじめとする文献では、深泥池の南にあり、天皇の御陵あるいは車塚ではないかとされていた。また、その位置関係から『京大絵図』に描かれた小山がこの王塚であろうとの結論に達した。江戸時代の文献に見える車塚の呼称については丸川義広氏の論考<sup>(19)</sup>にあるように、車塚が即ち前方後円形の墳丘を指すとは言えないものの、『京大絵図』に描かれた小山の形は、前方部を南東に向けた前方後円形に見えるのは筆者だけであろうか。

一方、同じ塚を指して十八世紀には「小塚」といい、松崎の西にあるという。この呼び名からは先にも述べたように、文字通り小さな塚であるという印象を受けるのみで、ましてや御陵というには程遠いものである。このあたりが、『山州名跡志』の記述にも現れているのであろう。異なる塚を指した可能性も考えられるが、『近畿歴覧記』に記された時点から『山州名跡志』に記されるまでに、開削などによって著しく塚が削られてしまうようなことがあったのではないだろうか。

このようなことから、「王塚」という名称は忘れられ、また「小塚」という名称も塚が小さいことで塚自体の存在があまり気にとめられなくなり、その後の文献に記されなくなったのかもしれない。そして、完全に墳丘が失われるころには、東の塚に対する西の塚であり、また西大塚・石城山とよばれるに至ったと思われる。また、瓦や墓石などが多量に出たというように、ある時期瓦などを用いた祠のような建物があった可能性もある。墳丘が完全に失われたのは、昭和三年から開始された区画整理事業の時であったと思われる。

『京都府遺跡地図』第4分冊<sup>(19)</sup>には、「半木町塚跡」として登録され、伝「山城山」とされている。しかし、この塚は古くは王塚、小塚、新しくは西の塚、西大塚、石城山と呼ばれてきたことを本稿では明らかにした。なお、『京都府遺跡地図』の伝「山城山」は石城山の間違いであると思われる。

1996年京都市では遺跡地図の改訂作業が行なわれ、1986年版には登録されていなかったこの塚も新しい『京都市遺跡地図台帳』<sup>(20)</sup>には「半木町塚跡」として登録されている。

最後に、筆者が聞き及んだ以下のような証言<sup>(21)</sup>があるので、紹介しておく。

昭和初年頃、このあたりにこんもりした山があって、石の部屋のようなものがあった。

子供の頃によくその山に登ったり、石の部屋に入ったりして遊んだ。今考えるとあれは古墳だったかも知れない。

つまり、石室が開口しており、自由に出入りできたと思われるのである。この塚は、横穴式石室を主体部とする古墳であったと考えられる。このことから、昭和に入って墳丘が完全に失われ

たときに多く出たといわれる墓石のなかには、石室を構成していた石材も含まれていた可能性も充分考え得る。

その立地は「はじめに」で触れた植物園北遺跡の南方にあたり、同遺跡がこの古墳の造営主体であったものといえよう。本年『京都市遺跡地図台帳』に登録されたことで、住宅の建て替えなどの工事に伴って調査が行なうことが可能となった。今後、関連する遺構や遺物が検出される可能性は高いものと考えている。

本稿は、実際の発掘による資料の全くない塚について、文献や絵図などを用いて考察した。筆者なりに力を尽くしたつもりであるが、いざ筆を起こしてみると、不十分な点が多く、力不足を痛感した。調査を進めれば、まだ管見に触れていない史料、たとえば塚を壊したときの記録やそのとき出土した資料などがある可能性は高いと考えている。今後、補足を行ないたい。

末筆ではあるが、『近畿歴覧記』の王塚の記述の存在は中村敦氏に教えていただいた。また本稿を成すにあたっては、丸川義広・堀内明博・内田好昭・高正龍・山本雅和の各氏をはじめとする多くの方々からご教示・ご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

#### 註

- (1) 昭和二年（1927）に「深泥池水生植物群落」として国が天然記念物に指定された。古くは泥濘池、美曾呂池、御菩薩池、御泥池などとも書かれたが、本文中では混乱を避けるため現在の深泥池と表記する。
- (2) 『平安京関係遺跡発掘調査概報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975年
- (3) 「下水道工事でわかった植物園北遺跡」『リーフレット京都』No.21 （財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1990年
- (4) 高橋潔「植物園北遺跡（第14次調査）」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1994年
- (5) 丸川義広編『岩倉幡枝2号墳 一木棺直葬墳の調査一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第12冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- (6) 高橋潔「下鴨の王塚」『リーフレット京都』No.80 （財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1995年  
なお、このリーフレットの図3の転載は柏書房刊『日本近代都市変遷地図集成』（1987年）よりとしているが、柏書房刊『慶長 昭和 京都地図集成—1661（慶長16）年～1940（昭和15）年』（1994年）よりの誤りであった。この場を借りて訂正しておきたい。
- (7) これら江戸時代の文献の主なものには野間光辰編『新修 京都叢書』全二十三巻（1967～76年、新修京都叢書刊行会）に収められており、本稿で用いた文献も基本的にこれに拠った。
- (8) 以下、本文中で用いる江戸時代の文献と明治時代の地誌の概要については註のあとに《文献の概要》として一括して掲載した。参照されたい。
- (9) 西京区山田北ノ町にある地藏院。西芳寺川の南岸の衣笠山の麓にあることから山号は衣笠山、俗に谷の地藏といわれ、また周囲が竹林で囲まれることから竹の寺ともいわれる。臨済宗天竜寺派で、本尊は地藏菩薩。現在の本堂は1935年に再建されたものである。庭園は平庭枯山水で、1987年京都市の名



勝に登録されている。

- (10) この史料三の後半、すなわち「又谷の地蔵院…」以下は、葛野郡の王塚についての記述である。丸川義広氏は「山城の御陵と車塚—江戸時代の地誌にみる車塚の由来—」1994 文化財学論集刊行会編『文化財学論集』のなかの「深泥池近傍の車塚」の項で、この史料三の内容から、葛野郡にある谷の地蔵院を深泥池の西岸にある地蔵堂（六地藏巡りの一つ）と思い違いし、葛野郡の王塚についての記述を愛宕郡の王塚と対になる車塚があると解釈されている。実際には、深泥池の近傍に車塚は存在しない。
- (11) 上ノ山古墳は西京区松尾上ノ山町に所在する古墳時代後期の円墳（径10m、高さ0.5m）である。穀塚古墳は同区山田葉室町に所在した古墳時代中期の前方後円墳（全長40.5m）で、大正三年に堅穴式石槨が調査され、昭和二十七～三十二年（1952～57）にかけての土取りのため墳丘が消失したが、その最中の昭和三十年には別の粘土槨が露出、調査された。また、近年の立会調査では周濠を確認し、埴輪などが出土している。丸川義広「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』第51号（1989 京都考古刊行会）に詳しい。
- (12) 現在、大阪府茨木市の太田茶白山古墳（三島藍野陵）が比定されている。
- (13) 古墳時代中期の円墳（径60m、高さ9m）、大正四年（1915）に主体部（粘土槨）が発掘され、舶載鏡をはじめとする豊富な副葬品が掘り出された。梅原末治が散逸した出土品を追跡、また発掘時の様子を「美濃山ノ古墳」として『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊（1920 京都府）に報告している。
- (14) 黒川道祐は、江戸時代前期の儒医。生年は不詳とされ、のちに安芸藩浅野の藩医となる。官を辞してからは京都白雲村（京都御所蛤御門辺り）に住し、著述に専念したといわれる。古典に精通し、京都の地誌・習俗の研究に余生を捧げた。没年は元禄四年（1691）。著作には『本朝医考』や『本草弁疑』、『日次紀事』などがある。
- (15) 松崎は、松ヶ崎のこと。『山州名跡志』巻之六によれば、下賀茂の北十四五町にあって東西に分れ、それぞれ東松崎、西松崎というところがある。現在の左京区下鴨松ヶ崎である。
- (16) 葵小学校創立五十周年を記念して1980年に葵小学校創立50周年記念事業会から発行されたもので、葵小学校のあゆみとともに葵学区の歴史や地名・旧跡などについても詳細に記されている。本校教諭の山崎先生には、この本の貸与と複写を快諾していただいた。
- (17) 1991年 下鴨の文化を子どもたちに伝える会編集発行。会の名の通り、下鴨の歴史、文化、変遷、暮らしなどを子らへ伝えることを目的に作られた。会の代表の中島正子氏には、ご教示を頂くとともにこの本を分けていただいた。
- (18) 前掲註(10) 丸川論文。  
氏は、車塚と称される塚には、現在考古学界に広く受け入れられている墳形が宮車に似ることから前方後円墳を呼ぶもの（蒲生君平の前方後円墳宮車説）と、これに対して江戸時代の地誌類にみられる御陵の近辺にあって葬送の際の車を埋めたという伝承によって呼ばれるものがあることを指摘されている。後者には円墳が含まれることや前方後円墳宮車説以前にこの伝承が広く行なわれていたことなどに言及されている。
- (19) 『京都府遺跡地図』第4分冊 [第2版] 京都府教育委員会 1989年
- (20) 京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 1996年
- (21) 1994年3月3日、北区上賀茂松本町在住の柴垣進氏より聴取した。

《文献の概要》

基本的に『京都市の地名』『文献解題』（日本歴史地名大系第二十七巻、平凡社、1979）によった。

『近畿歴覧記』 成立年不詳 黒川道祐著 十六巻十一冊 紀行

各地を探訪したときの様子を仮名混じりでまとめたもの。「三井行程」「神泉苑略記」「上賀茂行程」「下上賀茂正遷宮私記」「北山三尾記」「太秦村行記」「法金剛院古今伝記」「嵯峨行程」「東北歴覧之記」「東寺往還」「東西歴覧記」「大原野一覽」「北肉魚山行記」「石山行程」「石山再来」「江東行」の十六編で延宝六年（1678）からの10年間におよぶ。（新修京都叢書 第十二巻）

『雍州府志』 貞享三年（1686）刊 黒川道祐著 十巻十冊 地誌

都のある山城を長安のある雍州になぞらえて書名としている。実際の見聞に基づいて、山城の地理・沿革・寺社・古跡・陵墓・風俗行事・特産物などについて漢文体で記述し、自身の古典研究の成果が折り込まれている。（新修京都叢書 第十巻）

『京羽二重織留』 元禄二年（1689）成立 水雲堂狐松子著 六巻六冊 地誌

三年前に成立した『京羽二重』の遺漏を補う目的で、匹敵する分量を再編成したもの。その大半の情報を『雍州府志』から得たといわれる。（新修京都叢書 第二巻）

『名所都鳥』 元禄三年（1690） 著者不詳 六巻八冊 地誌

山城の名所を山・川・野・池・森・石・名木・谷・坂・古城・塚など四十一項目を取り上げ「〇之部」として、それぞれを愛宕・葛野・乙訓・紀伊・綴喜・相楽・宇治の各郡の順に記述している。各所に古歌を配する。（新修京都叢書 第五巻）

『山州名跡志』 正徳元年（1711）刊 釈白慧撰 二十二巻二十五冊 地誌

山城八郡三百八十六村を実地調査し現状を片仮名混じりの和文で描写。存亡・不明の社寺古跡を区別し符号で表す。平安城興起にはじまり、愛宕・葛野・乙訓・紀伊・宇治・久世の各郡、洛陽部、殿舎部、大内裏部、洛陽寺院・神社の順に記す。（新修京都叢書 第十五・六巻）

『山城志』 享保二十一年（1736） 関祖衡編 十巻九冊 地誌

『日本輿地通志』畿内内部六一巻のうち、巻一～十が『山城志』。郷名・村里・建置沿革・山川・関梁・土産・神廟・陵墓・仏刹・古跡・氏族・文苑などを漢文体で記述している。（日本古典全集三期 五畿内志）

『山城名跡巡行志』 宝暦4年（1754） 浄慧著 六巻六冊 地誌

内裏に始まり洛中の寺社旧跡を一条・二条…と南へ六条まで、また西ノ京を東から西へ進めるなど巡行の便を旨としている。（新修京都叢書 第二十二巻）

『京都府地誌』 明治八年（1875）着手～同十八年 京都府編。（京都府立総合資料館蔵）

太政官達により開始されたが内務省からの編集費打切りにより中断した。京都市街および伏見・久世・葛野・紀伊・綴喜・乙訓・愛宕・宇治・相楽・加佐の各郡、ほかは未稿といわれる。郡および町・村毎に分冊、沿革・境域・地勢・戸数・人口・山・橋・道路・名勝・学校・物産など三十一項目から構成される。

『愛宕郡村志』（現『洛北誌』） 明治44年（1911）刊 京都府愛宕郡役所編、一冊。

郡志を最初に置き、総記・区域・幅員・形成・管轄・気候・地質・郷村・里程・山岳・河川池沼・道路橋梁・運輸・地籍・租税・官衙・戸数・人口・学事・兵事・牛馬羊豚・舟車・農業・林業・工業・商業・物産・名産・民業・民力・神社・寺院・名勝旧跡・国宝特別保護建造物・古墳・逸事・風俗人情の諸項目を各村ごとに記す。田中・白川・修学院・下鴨・松ヶ崎・鞍馬口・上賀茂・大宮・鷹峯・野口・雲ヶ畑・岩倉・八瀬・大原・静市野・鞍馬・花背・久多の各村志が所収されている。

補記

本稿校正中に立川美彦『京都学の古典「雍州府志」』（セミナー [原典を読む] 9、1996 平凡社）の存在を知った。1995年国文学研究資料館の夏期原典購読セミナーにおける立川氏の三回の講義内容を文章化したもので、『雍州府志』を近世の山城国風土記と評価され、『雍州府志』および著者黒川道祐についてのみではなく、その前後を含めた多岐にわたる詳細な検討がなされている。本稿で部分的にこれに拠って補った箇所もあるが、充分活かすことができなかった。今後本書の本意とするところを検討し、後日を期したい。 (1996年8月6日稿、8月27日補)

史料一 『近畿歴史記』「東北歴史記」

延宝九年辛酉春三月十六日、朝辰ノ下刻、白雲村ヲ出テ、烏丸ヲ北へ、今出川通ヲ行ク、出雲路ヲ右ニ見、京極ノ中川ヲ渡リ、鴨川ヲ歴テ、御手洗ノ森ヨリ北ニ出ツ、御泥池ノ南ニ王塚トテ車塚ノ跡アリ、其ノ西ニ王塚繩手ト云フ路筋アリ、一代ノ主上御陵ト見ユ、何レノ御代ソ聞カマホシキ事ナリ、池ノ南ヲ歴、魔滅塚ヲ東ニ見、地藏堂ノ前へ出テ、御牛飼仙納カ宅ヲ過キ、二楽庵村井了設ヲ尋子訪ヒ、暫ク留談ス、…(後略)

史料二 『雍州府志』

(第十 陵墓門)

王塚 在御泥池南不知為何帝也惜哉其西有路之通西南者上是稱王塚曠古參詣人往來之道路乎

(第八 古跡門上)

王塚曠 在松崎西南王塚南倭俗一條道路謂繩手似牽繩之義乎古詣王塚之路乎

史料三 『京羽二重織留』卷之五 雑塚

○王塚 洛北みぞろ池の南にありこれまたいづれの陵たる事さだかならず其西に一すぢの道あり王塚繩手と云又谷の地藏院の門前に王塚と云あり是又一代主上の御車塚成べし

史料四 『名所都鳥』

(卷第十六 塚之部)

○王塚 塚 愛宕郡 御泥池の南に有。いづれの帝たる事をしらす。惜しかな其西に路有。是を王塚繩手といふ也。

(卷第十六 塚之部)

○王塚繩手 愛宕郡 松が崎の西南。王塚の南なり。王塚に行道なりとて名づつたり。

史料五 『山州名跡志』 卷之六(愛宕郡松崎の項)

△小塚 在松崎西二町許島中 伝云古山門ノ衆徒。於此所討死ス其骸體ヲ納ム。其僧侏儒ナルヲ以テ。小塚ト称スト。一説ニ王塚トイフハ。土人ノ片言ナリ

史料六 『山城志』 愛宕郡(陵墓)

荒墳 豆塚升塚在美曾呂池村 篠塚経塚在市原村 長塚在吉田村 小塚在松崎村 御塚在栗田口村 経塚在岩蔵村 又大石塔 基在大石塔 町元在六條坊門松屋町 大安寺 寺廢移 石塔于此

史料七 『山城名跡巡行志』 第三(松崎の項)

○小塚 在村西二町許島中

史料八 『京都府地誌』「愛宕郡 村志」(松ヶ崎村 古跡の項)

王塚 西南圃中ニアリ凡一坪ノ地山城志 二曰フ松ヶ崎村ノ小塚トハ乃是カ

史料九 『雍州府志』第十陵墓門 葛野郡

王塚 在谷地藏院門前疑是一代主上之車塚也今不詳其実惜哉

史料十 『山州名跡志』卷之十二 綴喜郡(内里の項)

○王塚 在同所山此所 内里 岩田 戸津 松井同領山也 塚高四間半。 巡八十間。伝云 継体天皇陵不審哉 延喜式曰継体天皇陵在撰津国嶋上 郡云云